

修学旅行、その意味と問題

——学習指導要領「特別活動」旅行・集団宿泊的行事の諸問題——

菊入 三樹夫

Bedeutungen und Probleme der Exkursion in japanischer Schulerziehung

Mikiko KIKURI

はじめに—旅行への期待

筆者は以前、学校教育の場において形成される生活意識すなわち学校文化と、庶民生活における生活文化との密接な相互影響による相互形成性について、かつて一般的に論じたことがある(菊入[1996])。今回はこの論旨をすすめて、学習指導要領「特別活動」にある第2内容のD学校行事のうち、(4)旅行・集団宿泊的行事、特にそこでの代表的な行事でもある、いわゆる修学旅行¹⁾に焦点をしぼり、これが持つ意味や役割、特にヒドゥン・カリキュラムとして果たしている意味合いについて論じるとともに、修学旅行やこれに代表される学校行事の持つ問題点、およびに今後のあるべき姿について論を進めることにしたい。

数ある学校行事のなかで、生徒たちの期待がもっとも高く、また印象深いものは修学旅行であろう(菊入[1996]P.3)。これは財団法人日本修学旅行協会の集計している諸統計を見ても明らかである(修学旅行協会[1993])。修学旅行は、社会的にも学校教育に不可欠な学校行事だと理解されており、修学旅行の実施には大いに理解を示している。例えば、旅行費用を出すことのできない家庭への行政による補助制度²⁾が存在し、またはるか以前からではあるが、鉄道料金の団体割引³⁾による旅行実施の支援をはじめとした交通機関の便宜提供としては、東海道新幹線開通以前の高度成長経済期、在来線運行ダイヤの間隙をぬって走行した「ひので」や「きぼう」などの「修学旅行専用列車」の運行⁴⁾、国鉄ストライキの際には、生鮮食糧品輸送の貨物列車とならんで修学旅行列車のみが、ストライキから除外されて運行し続けた事実などが、これを物語っている。

このような「国民的期待」を受けてか、1958年に告示された学習指導要領への措置として出された翌年の「中学校の教育課程に関する移行的措置」において、第3節の「学校行事等」に始めて「修学旅行」の語句が見られ、また1968年改訂の小学校学習指導要領に「修学旅行」の語句が、そして中学校の学習指導要領に「修学旅行的行事」の表記が初めて使用された。修学旅行は学校において、単に習慣的に実施されてきた行事としてではなく、教育的意義を有する、学習指導要領上の「学校行事」として、教育課程に正式に位置づけられたのである。

教職教養科 教育指導論研究室

だが、このように重用視され大規模になっていった修学旅行は、それだけに問題にすべき事柄や解決せねばならない問題点も多出している。例えば、旅行の内容や形態の多様化のなかでの観光・慰安的性格の肥大、私立学校における生徒募集インセンティブを念頭に置いた多額な費用をかけた海外旅行などの傾向である。また、労作・体験旅行の限界やマンネリ化などのほかにも、運営・実施を巡る旅行業者の介在や不祥事の発生、細かな団体生活規律や規制的な生徒指導の実態、交通機関を中心とした事故など修学旅行をめぐる問題は多い。

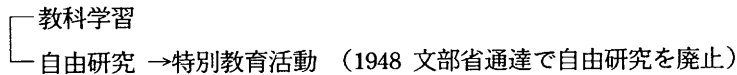
こうした修学旅行を巡る現状のなかにあって、そもそも修学旅行とは何なのか、学校教育の場における「旅行的行事」とはどうあるべきなのかなどについて、この場で論を進めていくことにしたい。

1. 旅行の学習指導要領上の位置づけと性格

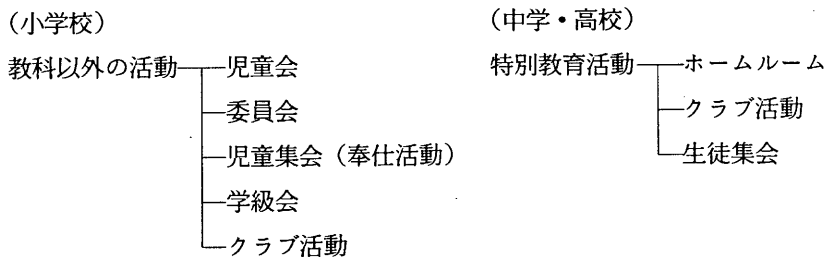
下に示したように、学習指導要領「特別活動」の改訂ごとの推移を追ってみると、種々の活動が事細かに規定されていったことが、一見して分かる。

【学習指導要領・特別活動分野の変遷】

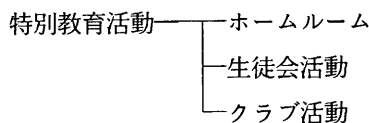
○ 1947 学習指導要領一般編（試案）



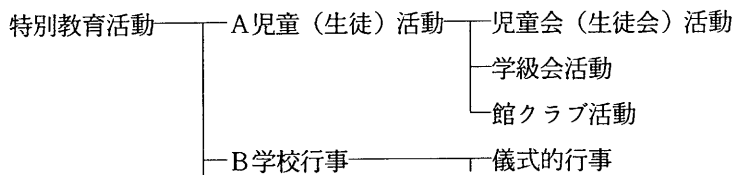
○ 1951 学習指導要領改訂（試案）

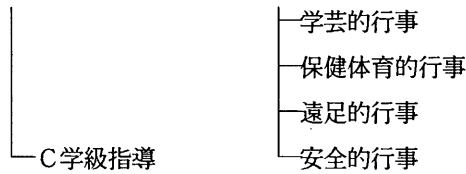


○ 1958 学習指導要領（告示）



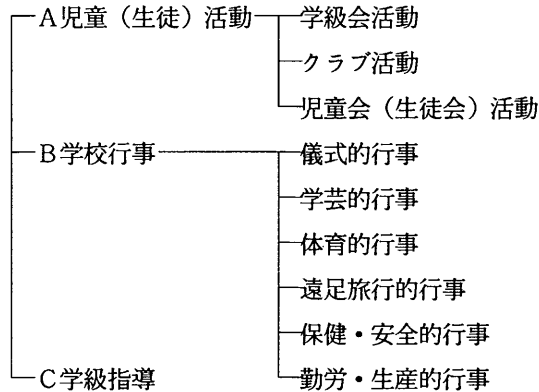
○ 1968 学習指導要領改訂





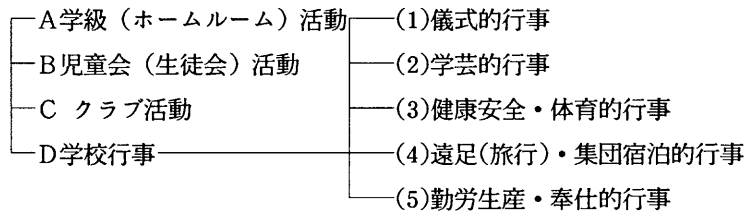
○1977学習指導要領改訂

特別活動



○1989学習指導要領改訂

特別活動



【歴代「告示」学習指導要領中の学校行事(A)と遠足・旅行・宿泊(B)についての記述説明文】

○1958小学校

(A)「学校行事等は、各教科、道徳および特別教育活動のほかに、これらとあいまって小学校教育の目標を達成するために、学校が計画し実施する教育活動とし、児童の心身の健全な発達を図り、あわせて学校生活の充実と発展に資する。」

「学校行事等においては、儀式、学芸的行事、保健体育的行動、遠足、学校給食その他、上記の目標を達成する教育活動を適宜行うものとする。」

(B)説明文なし

○1959中学校の教育課程に関する移行措置（58年「告示」の学習指導要領にはない）

(A)「学校行事などにおいては、儀式、学芸的行事、保健体育的行事、遠足、修学旅行、学校給食、その他上記の目標を達成する教育活動を適宜行うものとする。」

「学校行事等は、学校が計画し、実施するものであるが、その計画や実施にあたっては、生徒に自主的な協力をさせるように配慮し、特に特別教育活動との関連を図るこ

とが望ましい。」

(B)説明文なし

○1960高等学校

(A)「学校行事は、主として全校または学年、あるいはそれらに準ずる集団による活動とし、次のことがらを適宜行う。(1)儀式的行事……(4)旅行的行事……」

(B)「旅行的行事においては、平素と異なる生活環境の中であって、見聞を広めるとともに、楽しく豊かな集団生活を行うことにより、集団生活のきまり、公衆道徳などについての望ましい体験をつむような活動にすること。(「内容の取扱」より)

○1968小学校

(A)「学校生活に秩序と変化を与える教育活動によって、児童の心身の健全な発達を図り、あわせて学校生活の充実と発展に資する。このため、(1)行事に積極的に参加させ、日常の学習成果の総合的な発展を図るとともに、学校生活を明るく豊かなものにする。(2)集団への所属感を深めさせるとともに、集団行動における望ましい態度を育てる。」

(B)「遠足的行事：遠足、修学旅行その他」(とあるが、説明文なし)

○1969中学校

(A)「学校行事の内容は次のとおりとする。(1)儀式的行事……(4)修学的旅行的行事……」

(B)「修学旅行的行事においては、平素とは異なる生活環境の中であって、見聞を広めるとともに、楽しく豊かな集団行動を行うことにより、集団生活のきまり、公衆道徳などについての望ましい体験をつむような活動にすること。」

○1970高等学校

(A)「学校行事は、主として全校または学年、あるいはそれらに準ずる集団による活動とし、次のことがらを適宜行う。(1)儀式的行事……(4)旅行的行事……」

(B)「旅行的行事においては、平素とは異なる生活環境の中であって、見聞を広めるとともに、楽しく豊かな集団行動を行うことにより、集団生活のきまり、公衆道徳などについての望ましい体験をつむような活動にすること。」

○1977小学校

(A)説明文なし

(B)「校外において見聞を広め、集団生活のきまり、公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。」

○1977中学校

(A)説明文なし

(B)「平素と異なる生活環境の中であって見聞を広め、集団生活のきまり、公衆道徳などについての望ましい体験を積むような活動を行うこと。」

○1978高等学校

(A)「学校行事は、主として全校若しくは学年、またはそれらに準ずる集団による活動とし、次の行事を適宜行う。(1)儀式的行事……(4)旅行的行事……」

(B)説明文なし

○1989小学校・中学校・高等学校

(A)「学校行事においては、全校又は学年(又はそれらに準ずる集団)を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、集団への所属感を深め、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。」()部の文言は高等学校のみ

(B)「平素と異なる環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。」

このように学校活動の規定が細分化していく中で、1968年の中学校学習指導要領の、「修学旅行的行事においては、平素と異なる環境の中において、見聞を広めるとともに、楽しく豊かな集団行動を行うことにより、集団生活の決まり、公衆道徳などについての望ましい体験を積むような活動をする。」の記述から、現行1989年改訂の学習指導要領の「平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。」との文言まで、さほどの変化はないことが分かる。

修学旅行それ自体の実施意図や意義づけとともに、修学旅行は学校行事の一環であるから、学校行事の実施意図にも注意を払わねばなるまい。例えば現行の学習指導要領によれば、学校行事は小学校・中学校では、「全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、集団への所属感を深め、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。」とあり、高等学校ではこれに加えて、「全校もしくは学年又はそれらに準ずる集団を単位として」とあるが、あとの文言はまったく同一である。「所属感を深め」ることが学校行事の目的の一つにあるが、そもそも特別活動の第1目標には「集団の一員としてよりよい生活を築こうとする」とあるように、集団の一員としての自覚を促すことが強調されているが、加えて学校行事の(3)健康安全・体育的行事には、「規律ある集団行動の体得」及び「責任感や連帯感の涵養」があげられ、当の「旅行・集団宿泊的行事」でも、「集団生活の在り方」があげられている。集団の語が現れないところでも、儀式的行事では「学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい」とあるように、いわば「生活共同体型」の集団を維持・活性化させるような役割を果たす行事が、教育課程上に多く設定されているのである(だが同時に「楽しく、豊かな」といった表記はなくなる)。

これにたいして欧米の学校教育においては、一般にいわゆる儀式は存在せず、行事もクリスマス・パーティーや卒業セレモニー(出欠自由)くらいであることと対比すれば、多種多様な

学校行事があること自体が日本の学校教育の特色でもあるということができよう。その上、子どもを取り巻く多様に存在する社会集団の中で、学校教育にみられる集団特性は「生活共同体型」の一典型であり、他の「学芸的行事」を通じて「生活共同体」的な集団に深く親しみ、同化するような実践的・体験的な活動を、子どもは学校教育の中で始終体験することになるのである。これが日本社会における、日本人の集団への関わり方や人間関係の維持の仕方、集団生活のイメージなどを大きく左右することになっている。

すなわち、学校行事は表現された文言とはまた別に、ヒドゥン・カリキュラムとして、生活共同体型の集団に慣れ親しむ訓練の役割を果たすことになっている。担任を中心とした疑似家族的な学級運営のあり方、クラス対抗や学校対抗の行事での結束力を誇示する盛り上がりなど諸々のあり方や行為が、卒業後も盛んに開催されるクラス会や同窓会、またいわゆる「学閥」も含めて、学校やそでの下位集団への強い「所属感」を作り上げる源になっているのである。修学旅行も、学習指導要領における旅行・集団宿泊的行事の「平素と異なる環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行う」という表記された文言を越えて、上記した生活共同体型の集団意識や生活像の形成に大いに影響している。

さて、学校行事の意義としてあげられた「学校生活に秩序と変化を与え」ることや、同様に儀式的行事の「学校生活に有意義な変化や折り目を付け」といった生活感覚は、生活ルーティーンを「ハレ」と「ケ」で類型化する生活感覚に対応している。言うまでもなく「ケ」とは日常の授業・教科教育であり、学校行事は非日常的な「ハレ」の行事と言うことになる。また儀式的行事が「厳粛で清新な気分を味わう」ことが必要とされるのは、このような感覚で類型化された集団への加入儀礼としての入学式、離脱儀礼としての卒業式という役割を果たしているからに他ならない。同様な脈絡のもとに、修学旅行や運動会・体育祭などは「ハレ」の行事の役割を担っている。たとえ意識には上らないにせよ、学校生活を「ハレ」と「ケ」による生活ルーティーンとして受け入れる限り、これらの行事は他の行事に比べ、学校行事から外すことが難しい重要な役割を受け持っている。生徒にとって修学旅行が極めて期待の高いものになっているのも、今日に至ってもなお、学校における日常の学習が「ケ」として捉えられているからに他ならないことを暗に示している。

2. 御蔭参りから修学旅行へ

柳田国男がかつて『明治大正史・世相編』において、学校教育の場における運動会の成立について、収穫の吉凶を占う農耕儀礼と「出遊」・「遊山」の民俗的な行事と、富国強兵の国策とが結びついたものしており、民俗行事が形を変えながらも、学校教育の中に生き残っているとしたが、この指摘に習えば、修学旅行もまったく同様の解釈が可能である。

1886年師範学校令が公布され、師範学校が各地に開校されたその年に、東京師範学校が初

めでの修学旅行を実施してから、ごく短期間のうちに全国の学校にはほぼ同一の形態で修学旅行が広く普及したことも、運動会の急速な普及と軌を一にしている。これは日本の学校教育制度が、近代的な中央集権国家の形成に必要な「国民」を形成するべく、地域社会の拠点としての学校、明治国家のイデオロギー普及の場という役割を、学校に与えたことと深く関わっている。国家意志を全国一律に徹底するために、村落など地域共同体を国家機構の末端に組み込むにあたって、それまで祭事や年中行事を、独自に執り行うことで示された地域共同体のもつ自律性を奪うのに、学校の役割は重大であった。学校は民間の祭事や年中行事を学校が肩代わりする形で受け継ぎ、地域の新たな核の役割を果たすことになった。運動会や学芸会が学校行事というよりは、全集落、全地域をあげての公開行事になったのは、かかる経緯と密接に関わっている。

修学旅行も同様の特性を持っている。なるほど、初見される東京師範学校が実施した旅行が、心身鍛練、集団行動の兵式訓練をモットーにしており、戦前期とくに戦時体制下で行われたものは、軍事的色彩が強かったが（戦争が激化すると実施されなくなる）、戦後になると日本の経済成長にあわせて、観光地が整備され、みやげ物屋や飲食施設がにぎわい出すと、かつての御師に率いられた各種の講や御蔭参りのような、ハレの気分を満喫する慰安的な要素の強い修学旅行が、実施されるようになる。むしろ戦後になって、軍事国家の重圧がはずれ高度経済成長に成功するとともに、一方で受験や管理教育のストレスが加わると、学校生活の日常の緊張を発散し、人間関係を確認、調整、強化する機会としての、ハレの「遊山」という側面を、修学旅行が強く持つようになった。

修学旅行は、地域共同体社会の時代からの日本人の団体旅行の様式を、とぎれさせることなく今日に受け継ぐ役割を担っている。集団宿泊（プライバシー感覚の薄さ）、日常性（モラルや規律）からの逸脱（散財やご馳走を含む）、御師先達・旅行社添乗員に多くを任せる参加者の受動性など、学校教育の場で生き残った団体旅行の「講中」的特性が、日本社会で見られる団体旅行（企業や町内会の旅行、団体パック旅行、学生が行う卒業旅行など）の性格に影響を加えることになった。

修学旅行は今日でも、近代的教育制度や学習指導要領に示された文言を越えて、実体的にはなおも民俗的とも言うべき「ハレ」の行事として受け入れられている印象は色濃く、内容的に見ても、現に基本的に「物見遊山」であるものは多い。たとえば、有名寺社見物や東京ディズニーランドの開設以降、各地にできたテーマパークでの遊覧、またそのような場での散財、その原資は家族などからもらった銭別や小遣いであり、その人達への土産の購入などに現われ、またその解放感も、「旅の恥は掻き捨て」の破廉恥なものも含む行儀の悪さにも見ることができる（これは駅や観光地などで日常的に目にするができる。海外修学旅行も盛んになり、外国の空港やホテルでの同様の非常識な振る舞いが報告されている）この行儀の悪さは、若衆宿における祭時のエネルギー密度の高い非日常的な時空、すなわち「異なる環境」が形成されるからであり、若年の男女が公然とつき合える場（あるいはそれが期待できる場）、喧嘩の場

への能動的な期待の場となるからでもある。

学校行事は、「生活の仲間」意識を強化する機会としての年中行事を受け継ぐ側面を持ち、学校生活の仲間であることの確認・強化の機会として重要な位置を占めている。「集団宿泊」としての修学旅行は、部活動の合宿と並んで、学校の仲間への加入儀礼を経た者同士の強い一体性を作ることになる。これが卒業生の持つ同窓生意識やノスタルジアへと連なっていくのである。なお修学旅行の延長線上で、近年大学生の間で盛んになった「卒業旅行」は、豊かな時代にモトリアムを謳歌する若者の様相を示しているが、同時に、今日の大学生が「選ばれし者」ではなく、伝統的な庶民の楽しみ方を忠実に楽しむ「庶民」であることを、大学の大衆化を如実に示していることも指摘して起きたい。

3. 山積する問題

学校は何をねらって修学旅行を実施するのだろうか。やはり、日本修学旅行協会の調査によれば(1993)、次の通りである。まず、「自然に触れる」とするものが51.1%と最多であり、その他、複数回答で順次、地理・歴史・政治・経済などの直接見学による学習の充実を44.4%があげている。また、40.4%が地域の文化・民俗・生活などの総合的な理解を修学旅行実施のねらいにあげている。国際理解・親善をあげるものも1.0%（国立高校では10.0%）あるが、これはもちろん海外の修学旅行を実施している学校である。

だが、これらを上回るのが学校生活上の効果、生徒指導上の意義、集団生活の決まりや公衆道徳についての望ましい体験を持たせるとするもので、79.4%の実施校にのぼっている。次に、師弟や生徒相互の人間関係を深めるとするもの74.5%と、人間関係の円滑化を上げる学校が多い。また、生涯を通じての学校生活の思い出作りを51.0%があげている。学習指導要領の「旅行・集団宿泊的行事」の文言に大変忠実であると言わねばなるまい。

さて、平均して4～5泊の修学旅行を実施するためには、生徒の入学以前から編成された学年担任を中心とした教師達の広範・多量かつ複雑な作業が必要であり、企画から終了まで、膨大なエネルギーが消費されることになる。費用積み立て用の口座の開設から、行程や宿泊施設の設定と確認のための下見、班分けや事前指導、アレルギーや持病の事前調査、行き先での事故に備えての当地の消防や警察への照会、保護者への説明など欠かせない作業が山積している。

このような労力のかかる実状にもかかわらず、多くの教師は修学旅行の実施を積極的に肯定している。日本修学旅行協会の同調査によれば、修学旅行について、次のような考えを持っている。

【高校教師】	これまでどおりの実施でさしつかえない	20.3%
	内容などを一部改善して実施する	56.4%
	内容など大幅に改善して実施する	15.2%
	廃止した方がよい	8.1%

を維持しようとする指導の手法が多く用いられる。また、そのような手法に頼らないと、平穩に旅行計画を遂行できないことが事実多い。旅行では異性交友での逸脱、飲酒・喫煙、喧嘩等の暴力行使、万引き盗難などが起こりやすい。逸脱者に対する教師の体罰も問題になり、1985年の筑波科学万博の際、岐阜県からの修学旅行生が教師の体罰により死亡した事例がある。

d. 教育行政による規制

公立学校に対する教育委員会の指導は、徐々に緩和されてはいるが、都道府県ごとに旅行泊数や旅行距離、航空機利用の是非、費用の上限規制などがあり、事実上、一種の歯止めの役割を果たしている。だが、これが学校の主体的な教育方針への規制ともなりがちであり、月並みな旅行に陥ることにもなりかねず、教育現場の活力をそぐことにもなりやすい。旅行内容への統制的な介入例もある。最近では、大阪のある中学校が沖縄訪問の際、米軍基地を見ることに對し、市教委が当初難色を示した（1998年4月28日、毎日新聞、同5月9日、18日朝日新聞）例がある。市教委のこのような、社会から目を覆うような教育内容への規制的な姿勢は、埼玉県のある高校の部活動が、731部隊用のネズミ飼育の歴史を取り上げて研究の発表に、当初好意的ではなかったことなどと共通しており、内向きの姿勢は否めない。学校の主体性、裁量を重視し、指導内容を前もって設定制限する管理的な「指導」的手法を改める必要がある。また、諸外国で行われている形態を積極的に取り入れ、旅行形態の多様化を認め、直接の教育効果を性急に期待しないことも重要であろう。

e. 旅行業社が重要な役割を演じるようになってきていること

一学年の生徒数も多数になり、大規模化・長期化・遠距離化した旅行の運営に不可欠な存在になったのが旅行業者である。彼らはかつての御師や先達の役割を演じており、多人数を収容する宿舎の確保、交通機関の予約など、どれ一つとっても旅行社業なしには旅行は遂行できない状況になっている。とくに大規模校はこれらに腐心する。旅行業社は、例えば宿舎は1年以上前に予約確保しなければならず、すると旅行内容の変更・改善は行われにくくなる。ややもすると、生徒は旅行業社の添乗員について回る「おまかせ旅行」の体験をすることになり、日本的パック旅行の型を、旅行社がリードする修学旅行で体得し、生徒は旅行業社の将来の「お得意さん」として養成されることになるのである。また、1回修学旅行を実施すると、その「旅行手数料」は莫大な額に及ぶ。旅行業者の、学校管理職や旅行担当教員に対する接待などの便宜供与が明るみに出た事例も多い。

これらの問題が解決されなければならないのは、当然である。しかし、これらの問題が解決されている「模範的」な修学旅行が実施されたとしても、学校・教員の労力、肉体的・精神的な負担は相当なものである。これが学校教育の「コスト」に見合った行為であるのか、学校教育とは何をなす場なのであるかというラインまで立ち返って考えてみる必要があるだろう。

さきに紹介した、教員に対する修学旅行に関するアンケートでも、「これまでどおりの実施

でさしつかえない」とするものと、「内容などを一部改善して実施する」とするものは、中高教員のいずれも80%程度に達し、現在の旅行形式に対しておおむね肯定的である。教員は自らの修学旅行体験を自分の生徒達にも与えようとしていることが分かる。それは教育的に有意義であるとの考えに他ならないが、このような学校教育観こそ、教育コスト問題も含めて再考すべきものであると考える。

4. 多様化と新しい傾向

上記のような状況のもとで、修学旅行廃止論が出てくるのも当然である。廃止論はすでに60年代半ばには存在していた。これに対して修学旅行協会は、当時の修学旅行の問題点を次のようにまとめている（修学旅行協会[1969]）。

- a. 目的が不明確で観光旅行化している。
- b. 定型化、画一化している。学校の主体性が乏しく、教師の指導性が弱くなっている。
- c. 見学箇所が網羅的、盛りだくさんで浅薄になり、所期の効果が上がらず、疲労のみが多い。
- d. 交通事故の危険が増大し、宿泊・食事などの安全管理が不十分。
- e. 団体行動中での指導上の問題が出てきている。
- f. 保護者の経済的負担が増加している。
- g. 教職員の負担が過重、勤務の問題点が出ている。

マンネリ・類型化した観光・見学旅行に対する社会の批判や学校自身の反省が、各学校の独自の工夫をもたらすことになり、これが修学旅行の多様化へとつながっていった。修学旅行の多様化にも時代的なトレンドが存在する。グループ見学の導入やテーマ・コース別修学旅行（広島平和教育、体験分宿、スキー合宿など）に顕著である。しかしこれも一時代を経過すると、やはり清新さを失っていき、この形態の旅行も行き詰まってくる。広島訪問にあっても教員の学習不足やマンネリ感などから、旅行者任せにするなどの傾向も一部に見られるようになってきた。（「ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手伝う会」の代表H氏は、ヒロシマの語り部として被爆体験を修学旅行生に語り続けてきたが、「教師が勉強せず、業者頼り。パック旅行と同じになった」として引退した。1995年8月7日、朝日新聞）

このような中でまた新たな試みがなされることになる。例えば、日本海まで200キロの踏破旅行を試みた埼玉J高校（高文研[1995]）や、「近江商人」の伝統を受け継ぐ滋賀H商業高校の行商体験修学旅行、国有林で植林実習を行った千葉N中学校（いずれも1993年10月26日、毎日新聞）や、炭焼きや芋掘りなどの農山村生活体験をした神奈川W高校（1993年10月26日、朝日新聞）、オーストラリアで高校生交流を始めとして、豪州社会の総合的理解を追求した埼玉S高校（1995年1月11日、朝日新聞）などがあり、また海外の姉妹校を訪問旅行をする独自の方向性を示す学校も少なくない。

これらの実施校にすべて共通するのは、その時代が持つ問題に敏感であり、学校側のきめ細かな事前の調査や指導によって、生徒の問題意識を掘り起こし、事後においての旅行の成果の定着のための努力を着実に重ねていること、またそれに応える生徒の生徒の主体的な参加意欲である。これこそ修学旅行が期待するものであろう。

このような各地、各校での実態を反映した独自の修学旅行が実施されるようになり、その中の一つに「わらび座修学旅行」もある。わらび座というパフォーマンス集団に宿泊して、ソーラン節の集団パフォーマンスを習得し、農村体験を併せて行うことをテーマにしたものである（高文研[1995]）。今日の中高生のおかれた「シラケ」た状況からの脱却のきっかけの模索のあとがよく理解できる。全身全霊を傾けて何かに没頭したこともなく、人と連帯することもまたそのような機会も与えられず、分断され孤立化している子ども達は、与えられた集団に受動的に対応はするが、能動的に集団を形成し、運営する事はなかなか難しいものになっている。このような機会が今日の学校教育の中で与えられにくくなっている。いや、むしろ避けられているのではないと思われる場合すらある。このような状況があつてこそ「わらび座修学旅行」などの体験型の修学旅行が成立するのである。そして、わらび座の持つ共同体型の人間関係作りが最初は消極的だった子ども達が、参加し作業をすることで、子ども達の共感を勝ち得ることになるのである。（わらび座の団員の多くも、子ども達と同様の気持ちからわらび座に参加したとのことである。）

この試みには多くの成果を見いだすことができよう。だが、そこにはある種の偏りも垣間見ることができる。いわば、農本主義的とでも表現すべき生活・社会観、生活共同体型の人間関係をア priori に本来的なものとする傾向などであり、プライバシーの尊重に代表される個人主義、他との相違を関係の基礎におく近代の原理に対する反感もかいま見られる。

密接な集団生活を本来的なものとして、それに回帰しようとする運動は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツを中心に興隆した青年運動や各種のコロニー運動にみることができ、わが国でも「新しき村」などの自給的集団生活の運動や、ある種の新興宗教団体にも見ることができる。しかしながら、近代的疎外状況のアンチ・テーゼが即、農本主義的な共同体生活体験とはならないはずである。体験型の旅行が今日の学校教育の場におけるアトム的孤立からの対症療法的な解決方法であるにしても、総体としては「反動的」な方向性（新たな社会形成の契機にはストレートにはつながらないとの意味合いで）をも併せ持っていることを指摘しておきたい。

子ども達の孤立状況は、今日の、人間性さえもが商品化される大衆消費社会状況や、そこでの学校教育の状況（受験制度や学校教育の社会的位置と評価、学校の大規模化やそれから起こる学校の管理社会化など）に多く負っているものであり、これより生じた、子どもに現れた諸問題を子どもの対応のみによって克服しようとするのでは、本質的な解決にはつながらないであろう。

5. 大衆ツーリズムの特性

既述したように、修学旅行は日本的な今日の集団旅行、大衆ツーリズムのプロトタイプとなったが、大衆ツーリズムが持つ基本的な特性にも考慮を払う必要がある。

いわゆる「常民」的な、民間に浸透していた諸行事を学校制度に組み入れることで、頂点としての中央政府と、底辺として全国の地域の末端との間に、一元的な発信・受容の関係が成立し、近代国家に不可欠な「国民」の形成に学校制度が大きな役割を果たし、また、この過程で学校教育が民俗的な諸行事を取り入れて、集団の維持・活用に供したことが、日本の共同体型の集団原理を根付かせることになったことは述べた。日本の学校教育の場で強く現れる、仲間意識や一体感をアприオリに容認する集団観や、ここに見られる過剰な情緒主義はこれによって培われている。旅と合宿を主な活動とするとは言っても、若年同世代の集団活動として、20世紀初期のドイツで繰り広げられたワンダーフォーゲル運動などの青年運動や、イギリスから広まったボーイスカウト運動、かつての社会主義国にみられたピオニールやコムソモールなど、特徴ある青年期の集団宿泊活動の実態を比較、対照、検討することで、わが国の学校教育における「旅行・集団宿泊の行事」の全体像をなお精査する必要がある。

慰安は大衆社会において重要な位置を占めている。大衆ツーリズムは其中でも中心的な慰安である(Kramer[1982],Cohen[1996])。ところで、全体主義的な体制も慰安を大いに活用し、組織化した。ファシズム時代のイタリアにおけるドーボ・ラポーロ(「仕事の後」、官製の大衆慰安運動とこれを実行する組織)(グラツィア[1989])やナチズム時代のドイツのKdF(「歓喜力行団」、ドーボ・ラポーロと同種の組織)は、慰安体験を通じて、大衆を全体主義体制へと吸引するのに大いに役立った。わが国にあっても、庶民的な「民俗性」は学校制度に組み込まれて、「八紘一宇」的な「民族性」へと移行していった。たとえば、伊勢神宮参拝は、当初の御蔭参りの形式から戦前期の修学旅行へと受け継がれたが、この過程で農業神としての伊勢神宮は皇室中心国家の民族神へ、米作農耕意識は「単一民族」イデオロギーの聖所へと姿を変えた。同様に1930年代の満州事変以降、日本が戦時体制に入っていく中で、修学旅行では横須賀軍港の訪問や皇居遙拝が必須項目になり、旅行を通して実地に「国民精神高揚」がなされたのである。

学校行事はヒドゥン・カリキュラムとして、国家主義時代の国民意識の形成と維持、全体主義体制へ引きつけることに貢献した。だが問題は、戦後に学校教育制度をはじめとして学校教育の目的やあり方などについて、根本的な見直しが行なされたにもかかわらず、学校が実施する旅行については検討されることもなく、食糧事情や交通状況が安定するとすぐに復活し、その後の戦後日本の経済的成功を反映して、日程、旅程など、規模や費用も鰻登りに拡大していった。このように至ったのは、学校教育では旅行などの行事を通じて、自己の属する集団への強い所属感、一体感を持つことが、アприオリに教育価値として承認されていたからである。学校での集団像も、集団形成の手法も、学校令による戦前期の学校教育観と変わらなかった。そ

れゆえ修学旅行にあっては、立案から実施、移動や食事に至るまで、基本的な枠組みは円滑な旅行の遂行を願う学校がこれを与え、生徒はその範囲内で小さな選択的自由活動が認められるという、よく見られる形式に多くは落ち着いたのである。そして、いわば旅行の主体でもあるはずの生徒は、多くが人任せの行程の中で「モラトリアム期」を謳歌しつつ、名物や土産物の購入などの散財や、行事、名所の見物、慰安施設などでの遊興などに関心を向けることになる。こうして慰安的な日本の団体旅行、旅行文化の形式、大衆ツーリズムの基本形が守られることになったのである。

むすびとして

思い出に残る盛り上がる修学旅行とは、学校での日常がいかに生き生きしたものになっていないか、感動のないものであるかと言うこととも関連している。今日の学校教育の問題点の一つはまさにここにあるのではないか。旅行などの特殊な行事が学校生活の頂点となるような学校生活観にこそ、反省を加える時が来ているように思われる。

それにはまず、「ハレ」としての行事観の裏に潜む、「ケ」としての学習観（学習からの疎外）の打破が必要であろう。そして何よりも、日常的な学習を新しく楽しいものにする必要があろう。また同時に、多様な儀式や行事を必要とする学校行事の実状、これらの儀式や行事によって維持されるとする生活共同体的性格の強い、固定化された学校の集団像などを相対化する必要があるだろう。

だがしかし修学旅行は、旅行で多様な体験をする子ども達を中心に、旅行を立案運営する学校、そして子どもの旅行体験を共感と期待を持って見守り援助する家庭、修学旅行を受け入れる訪問地の地域の人々、このように多くの教育分担によって修学旅行は成り立っている。家庭の教育力の低下、硬直した学校教育、地域社会の無関心がしばしば指摘され、教育を分担する各分野のアンバランスや教育力の低下によって、子どもの孤立化が進行する今日、修学旅行は子どもを中心としたあらゆる教育環境の形成の可能性を示唆していることも忘れてはなるまい。

だがこの際、人生に重要な意味を持つ旅行を学校が実施することで、学校教育は子どもに何を付与することになり、集団生活によって得られ、肯定・確認されるような人間関係の形成が、私たちの社会のメカニズム（維持や働きかけといった）にどんな作用をなすのかなど、旅行が人間や社会に与える役割（ツーリズム）を考えることも、当然、必要なことである。

註

- 1) 修学旅行との呼称は通称に過ぎない。これを実施する学校独自の名称もある。例えば、「研究旅行」や「スキー（登山・キャンプ）教室」（修学旅行にあたるものとしてこれらの合宿旅行を実施している場合）などもある。ここでは「旅行・集団宿泊的行事」のうちで、生徒が卒業するまでに体験する規模・期間が最も大きいもので、中学・高校では通常1学年時に実施されるものは除いたものをさし

て言うことにする。なお、「修学旅行」の語は『日本教育会雑誌54号』（1887）の「長野県師範学校生徒修学旅行」とあるのが最初の使用例であるとの説があるが、その前年に発行された東京高等師範学校の『東京茗溪雑誌』第47号に見られると、財団法人日本修学旅行協会の会長を長らく務めた荒川潤氏が指摘している。

- 2) 昭和34年2月に「修学困難な児童及び生徒のための教科書用図書 の 給付に対する国の補助に関する法律の一部を改正する法律」が成立し、「要保護及び準要保護児童・生徒の修学旅行費補助金」も昭和34年4月から支給されるようになり、今日に至っている。
- 3) 1889年、日本鉄道会社が50人以上の団体に料金割引を実施したのが初めとされる。
- 4) 1959年の「ひので」（東京～関西）、「きぼう」（関西～東京）を皮切りに、1960「こまどり」（名古屋～東京）、1962「とびうめ」（九州～関西）、1963「のぞみ」（九州）、「おもいで」（東北～東京）、1964「ゆうじょう」（中国～関西）、「わこうど」（中国～東京）、「なかよし」（中国）、1965「わかくさ」（東京～関西）、「わかば」（関西～東京）、1966「わかあゆ」（中部～中国）が登場し、全国各地の修学旅行生を輸送した（『修学旅行のすべて-1993』）。

「ひので」は東京・京都間8時間弱で運行、これは当時の特急に決してひけを取るものではなく、またNHK「みんなのうた」で「ひので号のうた」が流布されている。また、この時期の流行歌手であった舟木一夫は「高校学園もの歌謡曲」で人気を博していたが、その中に『修学旅行』（丘灯至夫詞、遠藤実曲）のヒット曲がある。1964年東海道新幹線が開通し、しばらくして修学旅行も徐々にこれを利用するようになると、1971年「ひので」、「きぼう」はともに終了、他も年を追って廃止されていった。「ひので」の輸送人数総数は2,402,636人とのことである。

- 5) 旅行業者JTB東北営業部は、修学旅行生のプロ野球観戦の切符を、正価の数倍でダフ屋グループから購入し、警視庁に事情聴取された。同営業部とダフ屋グループとの取引総額は、数千万円に上ると警視庁は見ている。（93年8月14日、毎日新聞）

参考文献

- 1) 菊入三樹夫；わが国の学校文化の位置と特性－庶民生活と国民文化をつなぐものとして－，東京家政大学生生活資料館紀要第一集，P.3- 1996
- 2) 財団法人日本修学旅行協会編；修学旅行のすべて-1993，1993
- 3) 柳田国男；定本柳田国男集。第24巻，筑摩書房，1970，P.390
- 4) 財団法人日本修学旅行協会編；修学旅行（臨時増刊）1969
- 5) 高文研編；修学旅行企画読本。高文研，1995
- 6) Dieter Kramer；Aspekt der Kulturgeschichte des Tourismus, Zeitschrift für Volkskunde 78 Jahrgang 1982, I, 1982
- 7) Erik Cohen；The Sociology of Tourism: Approaches, Issues and Finding, The Sociology of Tourism Theoretical and empirical investigation edited by Yiorgos Apostolopoulos, Stella Leivadi and Andrea Yiannakis, Routledge London, 1996
- 9) V・デ・グラツィア；柔らかないファシズムーイタリア・ファシズムと余暇の組織化ー，（豊下，高橋，後，森川訳）有斐閣，1989